千葉県公立高校入試の動向

「千葉県公立高校入試 / 令和２年度の概要」

総進図書　岡山　栄一　氏

千葉県公立高校入試/令和２年度入試の概要

（株）総進図書

岡山　栄一

過去最大を更新、37 校 54 学科（927 名）で二次募集！上位校も志願者減！

平成 23 年度入試において前期選抜及び後期選抜という入試制度となって 10 年目の入試であった。既に決定した事項として、来年度より、入試が一本化（選抜の機会が 1 回のみ）となる為、現行の入試制度での最後の年度であった。したがって、入試制度自体の変更点はなく、「県立学校改革推進プラン」の第 4 次実施プログラムにより、今年度は、四街道北高校に「保育基礎コース」、犢橋に「福祉コース」、成田北に「医療コース」、姉崎に「ものづくりコース」、天羽に「工業基礎コース」が設置された。平成 24 年度より始まった「県立学校改革推進プラン」もほぼ完了の域に達しており、残すは、君津高校と上総高校の統合（2021 年度より）、定時制課程の船橋高校と行徳高校の統合（2022 年度より）、佐倉南高校の三部制定時制高校への移行（2022 年度より）だけとなった。

前期予定人員	21,758 人（268 人減）
志願者数	36,644 人（1,043 人減）
志願倍率	**1.68 倍**（1.71 倍）
欠席者数	116 人（123 人）
受検者数	36,528 人（1,036 人減）
合格者数	21,111 人（440 人減）
実質倍率	1.73 倍（1.74 倍）
後期募集人員	11,351 人（9 人減）
志願者数（2/25）	14,743 人（662 人減）
志願者確定数	14,740 人（665 人減）
志願倍率	**1.30 倍**（1.36 倍）
欠席者数	11 人（6 人減）
受検者数	14,729 人（659 人減）
合格者数	10,442 人（102 人減）
実質倍率	1.41 倍（1.46 倍）

新しい入試制度については、毎年開かれる「入学者選抜方法等改善協議会」においてより具体的な選抜方等の内容が審議・検討される予定であったが、年 3 回の開催予定が、9 月の台風被害等による理由で 10 月実施の第 2 回目の開催が見送られ、7 月と 11 月の年 2 回の開催となった。その為、新入試制度について目新しい進展事項は少なく、選抜日程が決定したのみに留まった。より具体的な選抜方法や本検査と追検査の公正性をどのように確保するべきかといった問題等には幾分不安が残る結果と思える。一本化初年度の選抜日程は、出願－令和 3 年 2 月 9 日・10 日・12 日、学力検査等の実施－2 月 24 日・25 日、追検査－3 月 3 日、発表－3 月 5 日と発表され、一年前の本小論で予想していた日程通りになった。

今年度の前期選抜は、昨年度と同一日の 2 月 12 日（水）、13 日（木）に実施された。予定人員 21,758 人に対し、36,644 人が志願し、志願倍率は 1.68 倍となった。進学予定者数の減少（昨年度より約 480 名減少）に伴い、前期予定人員も 268 名減少したが（昨年度の大幅な倍率低下を踏まえ例年より減少幅は大きい）、それを大幅に上回る志願者数の減少があり、昨年度より 0.03 ポイント下降した。昨年度も前年度より 0.03 ポイント下降しており、2 年連続の大幅な下降であった。例年高い倍率を示す普通科だが、今年度は 1.83 倍とここ 2・3 年は下降の傾向が続いている。2.50 倍を超す異常な倍率の学校・学科についても、昨年度を下回り、14 校 15 学科（昨年度 16 校 18 学科）に留まった。上位校の学校の倍率も今年度に関して言えば、幾分抑えられた感がある。昨年度 3 倍を超える高い倍率を記録した市立松戸（普通科）、成田国際（普通科）は、その反動は大きく、大幅な志願者数の減少であった。昨年度より大幅な倍率上昇を示したのは、津田沼で、昨年度の 2.07 倍から 3.08 倍まで上昇した。また、昨年度も高倍率を記録した 3 学区の柏の葉は、今年度も志願者を増やし 2.99 倍まで上昇した。一方、志願倍率が 1.00 倍以下の学校・学科は、25 校 39 学科（昨年度 22 校 32 学科）となり、昨年度より大幅な増加を示した。昨年度は上位校と下位校の二極化の状態が顕著であったが、今年度に限って言えば、上位校から下位校まで万遍なく志願者の減少が見られ、また地域的にも都市部及び郡部隔たりなく減少の傾向で、特に郡部の落ち込みが例年以上に顕著であったと言える。学科別では、先にも述べたが、普通科は下降傾向が続いており、「理数に関する学科」は大きく

昨年度を下回る結果となった。逆に伸びを示した学科は、「看護に関する学科」、「国際関係に関する学科」、「情報に関する学科」が挙げられる。

後期選抜は3月2日に実施され、予定人員11,351人に対し14,740人が志願した。志願倍率は、1.30倍で昨年度より0.06ポイント下降した。後期選抜の下降傾向は非常に顕著で、平成29年度に1.44倍あった倍率は、平成30年度1.40倍、平成31年度1.36倍、今年度1.30倍となった。昨年度より志願倍率を上昇させた学区は、前期選抜も好調であった第3学区（柏・流山・我孫子他）と第9学区（市原・木更津他）のみで、特に第3学区は、第2学区の松戸地域からの流入により大幅な倍率上昇となった。都市部の第1学区（千葉市）及び第4学区（成田・佐倉他）は昨年度を大幅に下回り、特に第4学区については、昨年度より0.18ポイント（1.46倍→1.28倍）も下降という結果となった。第5学区～第8学区については、軒並み1.00倍に満たない低調な志願倍率となった。志願・希望変更を行った受検者は約300人で、昨年度と同様、船橋・市川・松戸の第2学区、柏を中心とした第3学区に大きな変動が見られた。八千代東（18人増）、津田沼（27人減）、沼南（23人増）、佐倉南（24人減）などが大きな数字を示した。2.00倍を超えた学校・学科は、昨年度より減少し、10校11学科であった。県内トップ層のうち、県立船橋と東葛飾は昨年度を上回り、特に東葛飾は、昨年度の2.09倍から2.46倍と大きく志願倍率を上昇させた。一方、県立千葉、千葉東はともに1.82倍と志願者数は減少し、少数激戦の入試となった。また、昨年度高い倍率を示した佐倉、成田国際の普通科、小金も2.00倍を超えず、昨年度と比較して幾分緩やかな入試状況となった。他では、県内トップの志願倍率を示した松戸国際の国際教養、前期選抜において大幅な志願者増を示した津田沼の倍率上昇が顕著であった。志願倍率が1.00倍に満たない学校・学科は、大幅増の昨年度をさらに上回る結果となった。1.00倍に満たない学校・学科は36校54学科（一昨年度26校38学科→昨年度37校50学科）にまで達した。地区上位校の成東や安房の各学校も1.00倍に達せず、低調な入試となった。その後に実施された二次募集は、例年にない募集人員（870名）を記録した昨年度をさらに上回り、927名の大募集となった。927名の募集に対し、158名が志願し、志願倍率0.17倍、20名を足切りし、合格者134名で、この時点で公立全日制には約800名の空き定員が生じる結果となった。

各学区の概況（第3・9学区以外、軒並み志願倍率下降！）

［1学区－千葉市］

学区（地域）	前期選抜	後期選抜
1学区(千葉市)	1.80倍(1.87)	1.45倍(1.55)
2学区(船橋・松戸他)	1.85倍(1.84)	1.41倍(1.47)
3学区(柏・流山他)	1.76倍(1.73)	1.42倍(1.32)
4学区(佐倉・四街道他)	1.69倍(1.74)	1.28倍(1.46)
5学区(佐原・銚子他)	1.20倍(1.27)	0.76倍(0.97)
6学区(成東・東金他)	1.29倍(1.46)	0.81倍(1.05)
7学区(茂原・いすみ他)	1.17倍(1.23)	0.88倍(0.98)
8学区(安房・館山他)	1.11倍(1.21)	0.45倍(0.56)
9学区(木更津・市原他)	1.52倍(1.50)	1.11倍(1.08)

昨年度大幅な定員減であった学区だが、今年度は地域連携アクティブスクールの泉高校のみの定員減であった。前期選抜及び後期選抜ともに、昨年度より志願者数を減らし、志願倍率は大幅な下降となった。県トップの県立千葉の前期選抜は、志願者数を少し減らし2.97倍に留まり、後期選抜もここ数年では最も低い1.82倍となった。2番手の千葉東も志願者数は減少傾向で、前期選抜の志願者は昨年度比90名の減少となった。昨年度の定員減も影響したのではないかと思われる。市立千葉の普通科は、昨年度より若干志願者減であったが、ほぼ昨年度並みの志願状況となった。理数科は、前期、後期選抜ともに厳しい入試（前期2.70倍、後期2.40倍）が続いている。隔年減少が見られる市立稲毛の普通科は、今年度は志願者増が予想されたが、思った程志願者は増えず、ほぼ昨年度なみの入試となった。昨年度文字通り総合学科となった幕張総合は、3年前に話題となった不明瞭な選抜方法から志願者数を減らしていたが、徐々に回復し、今年度は前期選抜2.68倍まで上昇した。千葉南、検見川、磯辺の各高校は、安定した入試状況が続い

ており、特に検見川は、昨年度の定員減で志願者数を減らしたが、今年度は志願者を増やし、前期選抜は2.50倍を超える厳しい入試となった。逆に、少し陰りが見えるのが、千葉西、千葉女子、千葉北である。千葉北の前期選抜は、大幅な志願者減で、倍率も昨年度の2.01倍から1.52倍まで下降した。千葉西、千葉女子も志願者数に減少傾向が見られ、特に、千葉女子の前期選抜の志願者数は、全体定員（280名）を割る274名に留まった。柏井、土気、犢橋の各高校は、緩やかな入試状況が続いている。専門学科では、市立稲毛の国際教養が、昨年度（2.07倍）とほぼ同じレベルで推移した。幕張総合の看護科は2.25倍で、例年になく低調な入試状況となった昨年度を大きく上回った。京葉工業、千葉工業といった工業系の学科は依然苦戦の状況で、ほとんどの学科において前期選抜で定員を満たすことができなかった。千葉商業は、とても安定した入試状況（1.35倍前後）が続いている。

表：前期選抜で志願倍率が高かった学校・学科

県立船橋	普通	3.39倍
津田沼	普通	3.08倍
東葛飾	普通	3.01倍
柏の葉	普通	2.99倍
県立千葉	普通	2.97倍
小金	総合学科	2.79倍
千葉東	普通	2.70倍
市立千葉	普通	2.70倍
市立千葉	理数	2.70倍
幕張総合	総合学科	2.68倍
鎌ケ谷	普通	2.62倍
佐倉	普通	2.60倍
柏南	普通	2.54倍
市立松戸	普通	2.53倍
検見川	普通	2.51倍

［２学区ー船橋・市川・松戸他］

第２学区の前期選抜は、ほぼ昨年度なみであったが、後期選抜は、松戸地区から柏方面への流出が影響したか、昨年度より倍率を下げた。定員減は、津田沼、船橋豊富、市川工業（建築）及び市川東の40名×4＝160名であった。この定員減に伴い、船橋豊富、市川工業（建築）及び市川東は志願者数を減らすが、津田沼だけは、「制服が新しくなります」といった理由も影響したか、昨年度より大幅に志願者数を増やし（143名増）、前期選抜3.08倍（昨年度2.07倍）、後期選抜2.03倍（同1.66倍）となった。船橋地区のトップ校県立船橋は、今年度も前期選抜県内普通科Ｎｏ.1の倍率を記録した。前期、後期選抜ともに志願者数を増やし、前期選抜3.39倍、後期選抜2.31倍の志願倍率を記録した。丁寧なかつ中身の濃い進学指導を理由に、幅広い地域から志願者を集めており、激戦の状況で安定した入試が続いている。昨年度やや持ち直した２番手の薬園台は、今年度は志願者を減らし、立ち直りの気配は見えないままである。低調な入試が続く中、今後の進学実績等に不安が持たれる。逆に、２年連続低調な入試となった船橋東には、回復の兆しが見られ、前期選抜では昨年度を大きく上回る461名（昨年度比112名増）の志願者を確保した。来年度に反動がでないか不安は残るが、進学実績等優れた面があるのも事実で安定した状況が期待される。同レベルの八千代の普通科は、安定した入試が続いていたが、今年度は若干志願者を減らす結果となった。中堅校の船橋芝山は、昨年度より志願者数を減らすが、比較的安定した入試が続いている。この船橋・八千代地区は、かなり高校の２極化現象が顕著で、八千代東、八千代西、船橋豊富及び船橋北は非常に低調な入試が今年度も続いており、特に船橋豊富は、定員を40名減らしたにもかかわらず、48名の大規模な二次募集を実施した。一方、地域連携アクティブスクールの船橋古和釜は、具体的な指導やアクティブスクールとしての特長が良く理解され、大幅な志願者増を記録した。

市川地区の国府台は、志願者数に減少の傾向は見られるが、比較的まだ安定した入試状況が続いている。しかし、国分については、２年連続の高倍率の反動か、約150名の志願者の減少となった。市川昴は、昨年度市立松戸の影響で大幅に志願者数を減らしたが、今年度はやや持ち直し、前期選抜1.98倍まで回復した。松戸地区では、小金、松戸国際（普通科）の人気が依然高いが、今年度は若干勢いが止まった感がある。小金は以前の生徒の自主性を重視する方針から、その伝統を継承しつつ進学指導にも力を入れてきており、進学実績等の向上も見られ、今後の伸びにも期待を持たれている。松戸国際の国際教養科は、第一志望率が高く、後期選抜では、県内トップの2.88倍を記録した。以前の松戸国際は圧倒的に女子が多かったが、男子の志願者が増加傾向にあり、その点を考えれば進学実績も今後伸びていくと思われる。昨年度の前期選抜において3.14倍という異常な倍率を記録した市立松戸は、100名の志願者減であったが、倍率は2.53倍で依然厳しい

入試が続いた。「市松改革」がどこまで浸透・継続していくか今後も注視する必要がある。一方、昨年度定員減及び市立松戸の影響で、大幅に志願者数を減らした松戸六実は、やや回復し、前期選抜約 60 名の志願者増であった。下位校では、松戸馬橋が安定して志願者数を確保している。

表：後期選抜で志願倍率が高かった学校・学科

松戸国際	国際教養	2.88 倍
東葛飾	普通	2.46 倍
市立千葉	理数	2.40 倍
県立船橋	普通	2.31 倍
市立稲毛	国際教養	2.10 倍
木更津東	普通	2.06 倍
津田沼	普通	2.03 倍
柏南	普通	2.00 倍
市立習志野	商業	2.00 倍
成田国際	普通	1.99 倍
市立千葉	普通	1.98 倍
小金	総合学科	1.95 倍
鎌ケ谷	普通	1.94 倍
柏の葉	普通	1.94 倍
幕張総合	総合学科	1.91 倍

［３学区ー柏・流山・野田・我孫子・鎌ケ谷］

第 3 学区は、前期選抜及び後期選抜ともに昨年度を上回る志願状況となった。特に後期選抜は、2 学区からの流入などにより、昨年度を 0.1 ポイント上回る 1.42 倍と高い志願倍率を示した。定員減は、昨年度に大幅な二次募集を実施した鎌ケ谷西のみで、鎌ケ谷西は、前期選抜は低調な志願状況に終わったが、後期選抜では志願が調整され、定員を確保する結果となった。東葛地区のトップ校である東葛飾は、昨年度県立東葛飾中学校の進学者の関係上定員を 80 名減じ、志願者数を約 150 名減らした。今年度の前期選抜は、ほぼ昨年度と同数の志願者数であったが、後期選抜では、約 35 名の志願者増で、志願倍率も 2.09 倍から 2.46 倍まで上昇した。学区 2 番手の県立柏の普通科は、隔年現象か、今年度は昨年の志願者を大きく上回り、前期選抜では 2.26 倍まで回復させた。但し、このレベルの学校ではやはり物足りない数字である。鎌ヶ谷及び柏南は、ともに安定した入試状況が続いている。依然、前期選抜 2.50 倍（後期 2.00 倍前後）を超える厳しい入試が続いている。鎌ヶ谷、柏南ともに、進学実績が伸びてきており、入学後の学習指導や進路指導にさらなる充実ぶりが期待されている。さらに、昨年度も厳しい入試であった柏の葉は、今年度も志願者数を伸ばし、前期選抜では 2.99 倍まで上昇した。柏の葉キャンパスという好立地の環境の為、生徒には非常に人気が高く、今後は進学実績などの出口の充実が期待されている。柏の葉と同レベルの柏中央は、今年度も志願者数を減らし、前期選抜 1.77 倍となった。これは、志願者数（382 名）が全体定員（360 名）をかろうじて上回る状況であり、360 名という定員が大きすぎる感がある。流山おおたかの森は、やや志願者数を減らすが、安定した入試状況が続いている。地元に人気が薄い我孫子は、今年度も前期・後期選抜ともに緩やかな入試となり、2 年連続で前期選抜の志願者数が募集定員の 320 名を下回る結果となった。下位校では、アクティブスクールの流山北が、昨年度に引き続き健闘しており、アクティブスクールとしての特長が浸透してきている。鎌ケ谷西、沼南、我孫子東、関宿などについては、大幅な二次募集を実施した昨年度ほどではないが、依然志願の状況には厳しいものが残った。

［４学区ー成田・印旛・佐倉・四街道他］

今年度は定員の増減はなく、昨年度の高倍率の影響か、前期選抜・後期選抜ともに大きく志願倍率を下降させた。前期選抜が 1.74 倍から 1.69 倍に、後期選抜はさらに大きく下降し、1.46 倍から 1.28 倍になった。倍率の下降を顕著に示したのが、成田国際の普通科であった。27 年度からのグローバルスクールの設置を背景に志願者数を伸ばしてきたが、今年度に限って言えば、前期選抜で約 100 名の志願者減となった。倍率も 3.03 倍から 2.18 倍と急降下した。しかし、国際科は昨年度とほぼ同レベルの志願者数で、2.03 倍と厳しい入試状況が続いている。トップ校の佐倉の普通科も、昨年度の反動が大きく、前期選抜で 2.60 倍（昨年度 2.92 倍）、後期 1.76 倍（同 2.46 倍）に留まった。特に後期選抜の約 80 名の志願者の減少が大きかった。同校の理数科はほぼ昨年度なみの志願状況で、理数志向の生徒をしっかりと確保した。中堅校では、幅は大きくないが、成田北が志願者増、印旛明誠と四街道は志願者減であった。佐倉東の普通科は、今年度も志願者を増

やし、前期選抜では 2.18 倍と厳しい入試となった。一方、富里は前期選抜で約 50 名志願者を減らし、後期でも定員を満たすことができず、二次募集を実施する結果となった。下位校では、20220 年度に三部制の定時制高校への移行が予定されている佐倉南が志願者増で、後期選抜では顕著な志願変更が見られた。

［５学区－銚子・香取・旭他］

低調な入試が続く学区である。今年度も志願者数は大きく減少した。前期選抜 1.20 倍（昨年度 1.27 倍）と下降し、後期選抜では学区全体で定員割れの 0.76 倍（同 0.97 倍）となった。トップ校の佐原の普通科は、志願者数を減らし、前期選抜の志願者数は 231 名で全体定員（240 名）を割り、後期ではやや持ち直したものの、1.16 倍と非常に低調な入試となった。理数科も低調で、後期選抜においてかろうじて定員を確保する状況であった。好調であった佐原白楊にも、ここ 3 年間は下降傾向が見られ、後期選抜 1.03 倍とこちらもかろうじて定員を確保できた状況である。小見川も、大幅に志願者数を減らし、後期選抜でも定員を確保できず二次募集を実施した。また伝統校の匝瑳高校も、今年度も志願者数が伸びず、普通科及び理数科ともに 2 年連続で二次募集を実施した。匝瑳高校の二次募集の定員は昨年度よりさらに拡大した。さらに、市立銚子も、志願者数は伸びず、後期選抜でも定員を満たせず、3 年連続で二次募集を実施した。このような大幅な志願者減の中、県立銚子は、前期選抜で志願者数を伸ばし、例年を上回る 1.92 倍となった。

［６学区－山武・東金他］

東金・山武地域では、全体として比較的緩やかな状況が続いていたが、今年度の志願状況はさらに緩やかなものとなった。40 名の定員減があった松尾高校のみ、ほぼ昨年度なみの志願者数を維持できた為、前期選抜、後期ともに志願倍率を上げた。トップ校の成東の普通科は、昨年度よりさらに志願者数を減らし、後期でも定員を確保できず二次募集を実施した。東金の普通科も、前期では約 50 名の志願者減で、後期でも志願倍率 1.09 倍の非常に緩やかな入試となった。東金商業も、前期選抜で志願者数を約 40 名減らし、志願倍率 1.03 倍、不合格者 4 名という低調な入試であった。普通科の他専門学科を設置する大網は、近年安定した状況が続いていたが、今年度は、どの学科も志願者数は伸びず、食品科学、生物工学の両学科で二次募集を実施した。九十九里は、昨年度よりさらに志願者数を減らし、募集人員 69 名の大規模な二次募集を、3 年連続で実施した。

［７学区－茂原・いすみ他］

7 学区トップの長生の普通科では、前期選抜の志願者数が大幅な減少（約 100 名）を示した。前期選抜の志願倍率は 1.63 倍で、志願者数が全体定員（240 名）を割る状況となった。その他の普通科である茂原及び大多喜は、志願者数は増加傾向にあり、今年度も若干であるが志願者数を伸ばした。総合学科の大原では、今年度も後期選抜で定員を満たせず、大規模な二次募集が続いている。農業系と工業系の学科を有する茂原樟陽は、農業系の学科は安定して志願者を確保できているが、工業系の学科は苦戦が続いている。この学区は、前期選抜 1.17 倍、後期選抜 0.88 倍が示すとおり、昨年度に引き続き非常に緩やかな入試状況が続いている。

［８学区－鴨川・館山他］

前期選抜 1.11 倍（昨年度 1.21 倍）、後期選抜 0.45 倍（0.56 倍）と、昨年度よりさらに緩やかな入試となった。トップ校の安房の志願者数は、ほぼ昨年度と同じで、後期でも定員を満たせず 2 年連続で二次募集を実施した。この学区の学校・学科全てで、二次募集を実施した。

［９学区－木更津・君津・市原他］

第 9 学区は、前期選抜、後期選抜ともに若干であるが志願倍率を上昇させた。前期選抜 1.52 倍（昨年度 1.50 倍）、後期選抜 1.11 倍（同 1.08 倍）であった。定員の増減は、総合学科の君津青葉及び京葉に各 40 名の定員減があった。トップ校の木更津は、2 年連続で志願者が減少し、前期選抜 1.91 倍、後期 1.37 倍に留まった。君津も志願者数を減らし、特に後期選抜では 1.13 倍と近年で最も低い倍率となった。他では、志願者数に増加傾向が見られる木更津東の普通科、袖ケ浦の前期選抜、定員減の京葉、一昨年のレベルを回復した市原八幡が、昨年度と比較して厳しい入試となった。